

クリスマスの主役

イエスの横顔

(イザヤ九・六)

夕食の席上「今年のミュージカルの主役はNちゃんだね」と言ったら「パパ、何言ってるのよ」と娘にたしなめられた。聴いてみるとクリスマスの主役はやはりイエス様だということらしい。「まっ、まだ飼い葉おけの中にはお人形のイエス様はいないんだけどね」とプチドヤ顔の娘を見て「なかなかやるわい」と思った次第である。

閑話休題。SNSの隆盛の背後で消えていったサービスに「プロフ」がある。簡単な質問に答えることによりプロフィールや日記が書けることから人気を博していたが、これは勿論英語のプロフィールの略語である。もともとはラテン語で輪郭を描くという意味であり転じて人の横顔、更に転じて人物紹介の意味を持つようになったという。今朝はイザヤのメシヤ預言から、救い主イエスと言うお方の横顔をスケッチしてみたい。

一、知恵と力に満ちたイエス

「その名は不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれる」。

というメシアの紹介は二つに区分して理解できる。そして「不思議な助言者、力ある神」という最初の二つはメシアが有している神の力と知恵について指摘している。確かにイエスは多くの人をご自身の知恵によって導いた。ちなみにこの個所は英語では「ワンダフル・カウンセラー」と訳されるので、イエスに市井のカウンセラー、特に非指示的なカウンセラーの姿を投影させる説教者もいるようだが、それは時代錯誤的と言わざるを得ない。実際イエスは積極的・能動的な助言者である。単に相手の話に共感し、受容するだけの存在ではない。彼は自らを指して救いの道であることをはっきりと示した(ヨハネ一四・六)。勿論イエスはその言葉を受け入れるかどうかは聴く者に委ねてはいるが、「これが正しい道だ」という方向付けをあいまいにすること決してなかったのである。次に力であるが、これはイエスが地上で行ったさまざまな奇跡を指す。イエスは多くの政治家や王のように武力で世を征服することはなかったが、多くの病をいやし、奇跡を行ったことよって、ご自身の力を示された。その最大のものは死者の中からの復活に他ならない。

二、父を伝え、平和をつくったイエス

後半の二句は前半に述べられた力と知

恵を用いてメシアが成した結果を述べていると考えることができる。イエスはその位格においては父なる神とは区分されるべき存在であるが、他方で「わたしを見たものは父を見た(ヨハネ一四・九)」更には「わたしと父とは一つです」と宣言し、自らの存在によつて父なる神を証している。そう考えられるとメシアに「永遠の父」という呼称が用いられるのもさほど難しいことではないと思われる。

また平和についていえば、これもまた神の知恵と力が具体的に現された結果であると考えてよい。しかしイエスの平和は人間世界にある、他者を制圧し屈服させる、いわゆる力による支配の結果としての平和ではなかった。むしろ彼は圧倒的な人間の力の前に低くされ、殺されたのであった。しかしこの犠牲から真の平和は生まれたのである。なぜならそのようなメシアの死によつて、あらゆる圧政と暴力の根源である罪は赦され、人は変えられるという福音が洗わされたからである。イエスは私たちが罪の代価を支払う贖いの代価であると同時に、私たちを買い戻す主人、つまり贖い主でもあるのだ。このように神の知恵、神の力であるイエスは全く無力な赤ん坊として生まれ、最後はまったく無力になり、十字架に吊るされた骸になってこの地上の生を終えたのだが、実にその無力さの中で彼は神と人との間におかれた敵意とば

つの関係を打ち破り、平和を造られたのである。この平和こそ、世界が求める真の平和なのである。

* * *

太平洋戦争が始まってから七十二年が経過した今日、平和を巡る議論は明らかに変化が生じている。戦後民主主義教育の中で徹底されてきた非戦平和、絶対的平和主義は否定され、兵力の均衡による戦争の抑止効果が声高に叫ばれるようになった。北朝鮮がミサイルを撃てば、アメリカは空母を展開といった具合である。確かに人間の社会における平和は危ういパワーバランスの上に成り立っているとしかいえないし、残念だがこの種の均衡的な平和以上の恒久的、絶対的な平和が世界に訪れるなどという意見はやはり樂觀論に過ぎないようにも思える。しかし、そのような争いにまみれた世の只中にイエスは来られた。そして彼は私たち罪ある人間たちに真理の助言を行い、カリスマ的な力を発揮し、永遠の父のみこころを表され、自己犠牲と贖罪ということをもつて平和を構築した。私たちキリスト者が目指すべき平和とはまさにこのキリストによる心の一新によつてはじまる真の平和である。このクリスマス、ぜひキリストの平和について語り、平和の君、イエスを待ち望もう。